

生命と回復

——〈規準〉としての健康——

はじめに

「回復」という現象ないし事柄は、実在の世界に属するか意味の世界に含まれるかを問わず、あらゆる事象を横断的に貫いているように見える。例えば、生き物の健康／病気の過程がそうであり、また、大気の循環、景気の動向、社会的関係、さらには数学の構造においても同様である。しかし、ひとたび「概念」の水準でみた場合、それは必ずしも明瞭であるとは言えない。さしあたり予備的に分析すれば、「回復」には、〈以前の状態〉〈そこからの逸脱〉〈逸脱から復帰した状態〉の三つの契機が含まれ、時間的に異なる二つの状態のあいだに「同一性」が想定される。そしてその「同一性」は、一定の形態の「安定性」をもたらしつつ、何らかの〈規準〉によって支えられている。このように「回復」概念

森 下 直 貴

の核心には〈規準〉があると考えられる。とすれば、それはどのような存在なのであろうか。以下の論考では、生き物の「生命」に焦点を合わせ、その生成の論理を浮き彫りにするなかで、「回復」の概念把握を試みることにしたい。ここで比較思想の観点からとりあげるのは、フロイト、ベルクソン、ヴァイツゼッカー、それにカンギレムの思想である。以上を通じて最終的にめざされているのは、医療という社会的な場の実践への架け橋となることである¹⁾。

一 フロイト——「無機物への回帰」

生命の「回復」に関して、その逆説めいた思想ゆえに真っ先に論じられるべきは、精神分析の祖、G・フロイトである。彼は生命の自己保存的な「安定性」を否定し、無機物への回帰すなわち

生き物の「死」を強調した。その特異な生命観あるいは欲動論を検討し解体することを通して、否定的な形ではあるが、生命にとっての「安定性」したがって「回復」のもつ意味合いを浮かび上がらせてみよう。

フロイトの思想は「快感原則の彼岸」(一九二〇年、以下「彼岸」と略記)を転機にして急角度で変貌する。振り返れば、精神分析の出発点は、「性の欲動(リビドー)」と「生(自我・自己保存)の欲動」との対立、そして後者による前者の抑圧にあった。ところが、ナルシズム(自己愛=リビドー)の現象があり、それを考慮するかぎり、「性=生の欲動」というリビドー一元論にならざるをえない。しかしこれでは、神経症を無意識の「抑圧」として説明する精神分析が成り立たなくなる(F:1:289, 340, 399f)。そこに要請されたのが「死の欲動」にはかならない。自我のうちにリビドー的ではない自己保存欲動すなわち「死の欲動」を想定すること、フロイト自身は個人的には死の欲動一元論に傾斜しつつも(F:3:302)、理論的にはひとまず「生の欲動(エロス)」と「死の欲動(タナトス)」とがせめぎあう二元論の枠組みに落ち着いたのである。その意味で「死の欲動」が初めて登場する「快感原則の彼岸」は、フロイトにとって重大な転機となった。

「彼岸」の理路を概略的に辿ってみよう。そもそも「快感原則」とは不快な緊張を減退させて快を求める心の傾向である。フロイトはそれを「興奮量」という量的観点から捉え、不快を興奮量の

増加、快をその減少として解釈する。刺激の増大は心的装置の負担を増し、負担が増えることは不快であるから、負担を減らせば不快も減ることになる(「快感原則」=量的観点、F:1:50-151)。その上でフェヒナーの「安定化傾向」に依拠しつつ、その「恒常原則」から「快感原則」を導き出してくる(「量的観点」=恒常原則、F:3:151)。以上は初期の「科学的心理学草稿」以来変わっていない(F:7:252)。

理路が急展するのはその直後である。「快感原則」=恒常原則」が成り立たない場合がある。それが「快感原則」を超えて不快な体験を繰り返す「反復強迫」である(F:1:63)。フロイトはその正体を捉えるべく、あえて「思弁」(形而上学)の領域に足を踏み入れる。そしてその正体を、心的装置の内部の「欲動」(E:1:66)に見いだす。最大の内部興奮の根源である「欲動」が大きすぎて心の装置では統御できないとき、「反復強迫」が引き起こされると言うのである(F:3:36-37)。

続いてフロイトは、その「反復強迫」から有機的生命一般の特性を導き出そうとする。それが、「以前の状態への回復」という生き物の「保守的」な性質である(F:1:12)。その場合の回復すべき「以前の状態」とは何か。生き物は死ぬことで無機物に還ると仮定し、無機物は生き物以前に存在したと考えるならば、それは生き物がかつてあった無機物的物質の状態ということになる。その状態は有機物にとって「死」を意味するとしても、この死によ

って無機的な「以前の状態」が復活するのである (F6:174)。

しかしそうなると、有機体の「進化」ないしは「発展」をどう捉えたらよいのか。フロイトはここで彼自身にとっても「異様な結論」を持ち出してくる (F6:174)。それによれば、有機体はそもそも変化を欲しなかった。外部の影響によって強いられて仕方なく無機物から離れ、死からますます遠ざかった結果、死に到る複雑な回り道をする事になった。したがって多様な欲動はそれぞれ固有の仕方であらう。遅いやり方をとる欲動は早すぎる死に対して激しく抵抗する。とはいえ、死をめざす欲動も、死への傾向を妨げる欲動も、すべてはそれなりに「保守的」なのである (F6:176)。要するに、フロイトは無理を承知で、「無機物への回帰」死を生き物の目標にしているのである。

それでは肝心の「性の欲動」はどうであらうか。フロイトはこの欲動についても、じつは死への道程を「引き延ばしている」にすぎないと見なす。だが、それでも明白に「性的欲動(エロス)」は「死の欲動(タナトス)」と対立している (F6:182)。とすれば、欲動の二元論が不完全ながらも成り立つと考えざるをえないだろう。ここで不完全という意味は、「快感原則」エロス」と「反復強迫」タナトス」とは、同一水準ではなく、別々の水準で働いているからである。このような捉え方は「彼岸」の後に際立ってくる。足早に追ってみよう。

翌年の『自我とエス』では、生命がエロスとタナトスという二

つの欲動のせめぎ合い(闘争・妥協)として、明確な二元論の形で捉え直される (F1:473; F6:285)。さらにその翌年の『メソヒズムの経済問題』になると、「彼岸」のそもそもの出発点が否定される。つまり、性的快感の「質的観点」が復活して「快樂原則」恒常原則」が破棄され(「快感原則」恒常原則)、「恒常原則」が「死の欲動」に結びつけられている(「恒常原則」涅槃原則」、F6:300-301)。こうして「現実原則」「快感原則」「恒常原則」という、三つの原則によって統御された心の三層構造が浮上するのである (F6:301)。

以上で見たように、フロイトの思弁は最終的には否定的な循環を描いて終わっている。彼の理路はその核心部であらざるに「逆説」に依拠していた。それを理路らしく見せていたのは、「恒常性」反復性」保守性」の多義的な使用である (Ma:106,117)。彼はそれを意図的に利用しながら、無理を承知で生命の「安定性」を迂回し、これを強引に否定する道を進んだのである。なぜか。死を目前にしたフロイト自身の不安と恐怖がその背景にあると推測される (Ma:132)。

結局、フロイトの「恒常原則」の曖昧さが「死の欲動」の強引な設定を可能にしていた。しかし、「以前の状態への回帰」としての「恒常性」もしくは「保守性」の解釈は、フロイトのそれとは別の方向もありうるのではないか。実際、フロイト自身も「器官の再生」や「治癒欲動」に言及している (F1:472)。それらは

「回復への欲動」として位置づけ直されるべきであるが、エロスとタナトスを主軸とする彼の欲動論では、一度も脚光を浴びることなく埋もれたままである。

二 ヘルクソン——「創造的進化」

生命の「同一性」ないしは「安定性」を同様に否定しつつ、しかもフロイトとは対照的な位置に立つのがヘルクソンである(B4:152,280-281,298-2989,306)。彼はフロイトの学説や思想に刺激を受けながら(B7:89;B2:141,283)、フランクスの意志主義の伝統を受け継いで独自の生命観を展開した。それが『創造的進化』(一九〇七年)である。この著作を中心にその前後の著作を読み比べるなかで、ヘルクソンの生命観(広くは形而上学)の特徴を押しえてみよう。その過程で逆説的にも、彼のいわば(動性一元論)に抗するような傾向(安定性・形の必然性)が、彼自身の思想の内部にも発見されるはずである。

ヘルクソンにとって宇宙とは、「動き」であり、「流れ」であり、「持続」そのものである(B4:29,342)。その内部を互いに逆行しつつ貫流しているのが「生命⇨緊張」の流れと「物質⇨弛緩」の流れであり、どちらも固有のリズムをもつ(B4:230,284,305;B2:251)。そしてこの両者が合流・衝突するところから一定の渦巻が生じるが、それこそ生き物(有機体)と呼ばれる抵抗の痕跡にほかならない(B4:117,121,182,284,305)。「生命」は「壊れ

ゆくなかで(物質を持ち上げつつ)創っていく流れ」として、個々の有機体や種を貫いて自己を実現していく(B4:281-282)。「躍動」を繰り返しながら純粹な動性すなわち創造行為へと向上し続けるのである(B4:292,302)。

このようにヘルクソンの「生命」の本質は「創造性」にある(B4:248,279-280;B7:41,48)。それは、新しいものの創造として自由な意味(B4:67,150,255,301)であり、広く言えば「心的なもの」もろくに「精神性」であり(B4:206,241-242,270-271,292,296)。ちなみに「神性」そのものでもある(B4:282-283)。とうことは、裏を返せば「意識⇨内的現象」が「生命」のモデルになっていることを意味する(B4:210-211,229-230,239-340,272-273)。意識⇨意志の自由⇨創造性⇨「新たなものを不斷に創っていく営み」という等値は、彼の最初の名著『時間と自由』以来一貫している(B1:209)。

それにしても、彼はなぜ「創造性」をそこまで偏愛するのか。研究者としての彼の出発点はスパンサーの進化論哲学にある(B7:10)。ただし、それを受け入れた上で、実証主義的な確実性の観点からその原理の曖昧さを批判していた。彼の主要な著作の端々から透けて見えるのは、当時の世俗社会(功利的⇨打算的B7:95-96)や、それと同盟する宗教界⇨教会(造物主と被造物の関係B4:282-283、恐怖による服従B6:182)。そして両者を支えるイデオロギー⇨形而上学に対して、徹底的に反逆する姿勢であ

る。それが「意識＝意志＝精神主義」に行き着くところに、西洋世界に固有のものの感じ方を窺えるのだが、ここでは深入りしない。

ともかく、実在(宇宙)を構成する「精神」と「物質」との対比、あるいは(フロイト由来のタームでは)「緊張」と「弛緩」との対比は(B2:231;B7:238-239)、ヘルクソンの思考において根本的である。しかし同時に、それと絡み合う形で、「動き＝実在」と「生き物＝身体」との対比もまた、劣らず根本的である(B1:129;B2:157;B4:153;B7:105,240)。いや、時間的に見れば、いっそう根本的であると言えるかもしれない。この後者の対比を抽象的な次元に移すと、「動き＝持続＝連続性＝時間性」と「不動性＝固定性＝安定性＝非連続性＝空間性」との対立になる。「直観」と「知性」との対立もその系である。ヘルクソン哲学はその誕生時から「不動性」または「安定性」への根深い敬意の上に建てられているとすら言える(B1:13)。

生き物のもつ「欲求的同一性」(B2:180;B7:85)による実在(時間性・動性)の切り取り(空間性・イマジネ)という枠組みでは、生命の「安定性」は否定され、その空間的な形はたんに乗り越えらるべき障害ないしは痕跡にすぎなくなる。しかし、ここで疑問を挿むならば、「動き」は必ずや一定の「形」をとるのではないか。しかも「形」をとるからといって、安定性即固定性とは言えないのではないか。そう捉えるのはヘルクソンの側の

意志＝精神主義に由来する歪みのせいではなからうか。

興味深いのは、ヘルクソン自身が実際に、「物質」と「知性」ならびに両者の「対応」をめぐって(B7:76)、微妙に揺らぎつつ、上述の枠組みから外れる動きを見せていることである。概略的に辿るなら、初期の『時間と自由』から『形而上学入門』までは、「物質」は「動き」そのものであり、それが生物の「欲求的同一性」によって「事物」として固定的に捉えられていた。最初の感覚は漠たる雲のような状態(振動)であるが、これにすぐさま意識＝記憶が働いて「凝縮」されるからである(B1:128;B2:80-81, 205,227-228;B7:240)。ところが「創造的進化」になると、「物質」そのものに動き＝持続とともに「空間化」への傾向があるとされる(B4:28,217,230,248,255)。ただし、「弛緩したリズム」や「拡散した持続」という捉え方と、「数学的秩序」や「空間化」傾向とがどのように内的に連関するかについては、それ以上言及されていない。そして『形而上学緒論』に到って初めて、「物質に内在する数学的構造」が登場してくる(B7:41)。

「物質に内在する数学的構造」が意味するのは、(生物の内在的な「類似性」は脇におくとして)「物質」それ自体が一種の同一性＝安定性をもつということである。ヘルクソンは一般概念の形成について、そのほとんどが知性と言語によって変形されている(現今のタームでは「社会的構築物」である)にせよ、その源泉にはあくまで物質の客観的実在性＝形式が存在すると指摘してい

る (B7:58-71)。そこには「物質」に関して〈動性一元論〉からはみ出し、動きが形・形式をとるという〈動性形思考〉が明確に浮上している。ちなみに、以上のような変化は、数学・幾何学の評価(否定・部分的な評価から積極的な肯定への力点移動、B7:241-242; B7:52-53)や、科学の位置づけ(直観でなくとも実在に到達できるとする考え B7:50-51; 86-87)とも連動している。

それでは、「対応」のもう一方の側の「知性」や「意識」はどうであろうか。知性もまたある意味では〈動性形〉といえないだろうか。ところが実際に、注意深く探査するならば、ベルクソン哲学の内部にもそうした方向の萌芽が見られるのである。例えば、そのうちの一つは、「知性」が「関係」を捉える能力であり、「アブリオリな認識フレーム」をもつという指摘である (B4:172-173)。もう一つは、言語がアナロジー(類比)の「動き」であるとされている点である (B4:184-185)。ちなみに、彼の言語観は、その基本は変わっていないにせよ、初期に比べると後期にいたって、記号と分離一点張りから言語の二重(即・離)の動きの洞察へと深まりを見せている (B7:232-233)。

あるいは、意識と内的生命が「記憶」の働きを通じて「雪だるま」のように膨らんでいくというメタファーも注目し値する (B4:118)。それをベルクソンは「創造性」の方向で解釈するのだが、それは別の方向 (B4:121-125)、すなわち、中軸をもちながら転がっていき、変化と不変とが共存するという解釈も十分に成

り立つのではなからうか。意識と記憶では、ベルクソンの著作群が実際にそうだったように (B7:106)、膨らみつつ変化しながらも、変化とともに変わらない要素(不動性)が残り続けるのである。

いくつかはみ出す動きがあるなかで、とりわけベルクソンの「知性」の見方を本質的に組み換える可能性をもつのは、『道徳と宗教の二源泉』で初めて提起された「假構・虚構」の働き (fiction; fabrication) ではないだろうか (B2:212, 242; B:6128-129)。「假構」の働きを中心に置くとき、知性と直観との二元的対比は融け始め、心の働きはすべて假構の働き of 多様な様相に転じるだろう。ベルクソンから離れて言えば、「假構」の本性とは、それがメタファー化であれ、概念化であれ、類比に基づく「構造化」(つまり顕著な特性のあいだの関係設定)である。動くなかで出来る上がる「形」、あるいは動くなかで働いている「形式」とは、どちらも本質的には「構造」であり、さらに「構造」の「構造化」である。とすれば、その「構造」が、物質から、欲求的反応の同一性、知覚、知性、言語、社会制度までを貫いているとは考えられないだろうか。同様に、『物質と記憶』の結論に抗して言えば、記憶や神経ネットワークもまた、眼球の(なぞり描き)象(り)の動き(視線)を基軸にして、実在世界に伸び広がる同型的な「構造」の循環的連鎖の一環と見なせるのではなからうか。

三 ヴァイツゼッカーとカンギレム

——「ゲシュタルトクライス」
と「規準設定力」

ここで、生命の「安定性」を否定するフロイトとベルクソンの対照的な生命観を検討するなかで、両者の思想の内部に彼ら自身の枠組みをはみ出す傾向、すなわちそれぞれ「回復」の欲動と〈動Ⅱ形の思考〉がそれぞれ存在することを確認してきた。しかし、両者ともに生命の「安定性」の正体を積極的に捉えているわけではない。それを捉える方向に決定的に踏み込んだのは、両者に縁のある二人の思想家、フロイトの精神分析をドイツの内科学に初めて導入したヴァイツゼッカーと、ベルクソン哲学の影響を強く受けているカンギレムである。最初にヴァイツゼッカーの思想から検討してみよう。

ヴァイツゼッカーは、生き物の営み自体が、すでに「生命であること」を蒙っているという根本事象(根拠関係)から出発する(G:324,89)。その点では生き物を認識する営みも例外ではない。

そのような根源的な受動性(パトス)ゆえに、不断に変化する環境のなかで、生き物は自らの統一性(主体性)を維持しなくてはならない(G:276-277)。この「パトスの主体性」は、不安定さのなかで前進しつつ自己に立ち戻る、あるいは、変化しつつ自己に還帰するという矛盾である(A:105)。つまり「反論理的」的な

「生成」であって(A:95)、「これを彼は比喩的に「円環」Ⅱ「ゲシュタルトクライス」と表現している(A:106)。

とはいえ、ヴァイツゼッカーにとって「主体」の導入は、「生と死」を医学に導入するための準備段階にすぎない(G:44:831)。生き物は互いに殺し合うことで生きている。そのことを包含する生命の構造は「死の連帯性」と把握される(K:312)。その意味で生命の本質は「犠牲」なのである(K:314)。「生命は決して死なない、死ぬのは個々の生き物である」(G:3)。

このような見方の背景には彼独特の原罪観と運命愛の思想がある(A:143-144,145;K:338-339)。一種の「永遠回帰」の視線から(G:290,301)、「彼は病氣と治療の意味の転換を企て、治療のシムナについて語るのだが(A:178,180;K:307,317,341)」。ここでその詳細を論じることはできない。

以上から窺えるように、ヴァイツゼッカーの思想では、生と死のバランスが「死」の方に傾いている。それには彼の健康観が大きく働いている。とりわけ健康の「規準」の否定が決定的であろう(G:79;K:340)。その結果、「死の連帯性」の荘重さに比べるとき、男女の愛情関係に由来する「生の相互性」に着目するだけでは、生の側が貧弱にならざるをえない(K:320)。彼はフロイトの「死との対決」ぶりを批判しているが(K:327-328)、「死の連帯性」と「生の相互性」という対比に関するかぎり、フロイトの「死の欲動」と「生Ⅱ性の欲動」の二元論の枠組みを超えて

いないように見える (A:115)。

ヴァイツェッカーの生命観の前段では、環境と主体との関わり
の内部に、生成⇨循環がしたがって一定の「安定性」が位置づけ
られ、生命の論理が、「ゲシュタルトクライス」の構造として取り
出されている。この論理と構造の把握はきわめて重要である。な
お、「パトリスの主体性」の捉え方には、サルトル流の「超越」や
「決断」のニュアンスが含まれている点は見逃せない
(A:108-109,111-113)。しかしその後段になると、生き物の円環
的な生成⇨循環が「死」の方向に引き寄せられることで、生命の
「永遠回帰」の循環に包み込まれている。死の視点はもちろん大
事であるが、それが前面に出すぎると、個々の生き物の日常的な
生命⇨循環の輪郭が薄れ、生の貧弱化を招くことになる。バラ
ンヌを取り戻すためのポイントが、彼が拒否し、カンギレムが救い
上げた「規準」である。

カンギレムもまた環境との関わりの中で生き物を捉えている
(C:176-177)。環境は「出来事」として到来する。その「不忠実
さ」に対して能動的に関わるには、「安定化」を目標として「価
值的」に選択せざるをえない (C:177-178)。カンギレムが「ハル
クソンとともに」独創的であるのは、その価値の「規準」が生き
物に内在している。つまり「生命に内在する規準」があると考え
た点にある (C:104)。

「規準」は事物を振り分け、序列化するための拠り所である。そ

れに適えば「正常」であり、それから外れば「異常」になる。
常識的には「規準」を設定する能力は人間にのみ帰属する。しか
しカンギレムは、プラトン以来の伝統に正面から逆らい、それを
人間に先立って生き物に帰属させる (C:104)。「規準設定力」
は固有の環境を設定する (C:209)。生命とは規準を設定する活
動にほかならない。

カンギレムによれば、「正常」と「健康」とは同じではない。
特定の環境だけでなく、どのような環境になっても規準を設定で
きるものが「健康」だからである (C:175-176,210)。そこからは、
新たな状況のなかで柔軟かつ不断に規準を創造するという「強
さ」が感じられる (C:181,210)。通常、一時的な安定をめざす動
きには、常用の規準を乗り越えるほどの強さはない。乗り越える
ような「強さ」は、むしろ「壮健」もしくは「元氣」という高次
の積極的な健康であろう。他方、「病氣」にも「規準」があるが、
それは特定の環境に固着し、新たな環境への適応性に欠けるもの
である (C:124)。そのとき生命の「規準設定力」は減弱している
(C:210)。

病氣と健康との関係に関してカンギレムの思想からは、病氣の
先行性、苦しみの個性性、そして目標としての回復、の三点を指
摘できる。それらを繋ぐとき、個々人の生きた経験として生命の
循環過程が浮かび上がる (Ma:177-178)。しかし、その過程をカ
ンギレムは「強さ」の方向に引き寄せ、偶発的な改造に「閉じて

いれば」病気に近く、「開かれていれば」それだけ健康に近いと見なし、「治る」とは時には「より高次の規準」を手に入れることだと考えている (C:210)。そこにはベルクソンの「創造性」の影が色濃く映っている (C:172)。結局、カンギレムの場合、ヴァイツェッカーとは対照的に、生命の生成Ⅱ循環が革新的な創造の生成Ⅱ循環によって抱え込まれることになる。

要するに、「規準」を具現した「規範的状态Ⅱ正常状態Ⅱ自然状態」というカンギレムの見方は、安定した状態への一時的な復帰の水準で捉えられ、かつまた、ヴァイツェッカーが把握した生命の循環構造に結びつけられるならば、生命の「回復」という事柄をとらえるのにならうまく適合した枠組みであると評価できるだろう。そして、やむをえず圧縮した断言になるが、その「回復」循環を中軸にして、そこにフロイトに由来する死を組み込んだ永遠回帰の循環と、活力(積極的な健康の次元)を織り込んだベルクソン流の革新・発展の循環とを重ねることで、生命という名の三重の生成Ⅱ循環の運動が浮かび上がって来るにちがいない (Ma:179-181,186)。

おわりに

生命の生成全体の中軸をなす「回復」の循環では、一時的に回復された状態が連続的に後続されるなかで、規準となる状態がそのつど焦点化され、際立ってくる。しかも、そうやって焦点化さ

れた状態は、生き物が環境のなかを生きるかぎり、不断に揺動し変動し続ける。そこに描かれる軌跡としては、おそらく、「波動」のメタファーが(あくまでメタファーだが)相応しいのかもしれない。それはともかく、焦点化Ⅱ回復されたⅡ規準となる状態こそはふつう「健康」と呼ばれるものの核心であり、また、その内的感覚が〈安らぎ〉にはかならないと言えよう (Ma:167)。

〈安らぎ〉は消極的な快感である。通常は病傷の回復とともに潜在化し、積極的な健康とこれに伴う快感(元氣・活力)の水準を支えつつ、その背後に隠れている(つまり、「健康」とは二つの水準の重なり合いである)。そのためか、誰もが日常ふだんの生活のなかで徹かに感じていながら、思想のレベルではこれまではとんど注目されることなく、聴き落とされてきた。しかし、「回復Ⅱ健康」したがって〈安らぎ〉を願わない人はいないとすれば、「安らぎ」の確保はケアという営みの核心にあり、したがってまた死にゆく患者にとっても重要な意味をもつはずである。

もとより人間は、たんに生物的身体の次元だけで生きているわけではない。それと同時に、物との製作的・道具的な関わりや次元や、言語・象徴的な意味の次元、それに社会的関係の次元でも生きている。そこからそれぞれ、自分のものごとくに自分の居場所があること、日々のささやかな目標をもつこと、誰かが側にいて繋がっていることが、最小限の焦点になってくる。そしてそれらが〈安らぎ〉を基点にして結びつき合うことで、患者の「希望」

が支えられるだろう。この論考のテーマは「生命」の「回復」に限定されていた。そこから視野を広げて、患者の生きる社会的な場や、さらに広く社会全体のなかで「回復」を問題にしようとするれば、あらためて人間社会の規準（規範システムの核心）に視線が向けられなければならない。⁽³⁾

(1) 引用に関して、フロイト著作集を「A」、ベルクソン全集を「B」、ヴァイツゼッカーの三冊の著作を「G. A. K.」、カンギレムを「C」、森下を「M」で表記する。例えば、「(Fig. 1) は（フロイト著作集）巻数・当該頁」を意味する。なお、ベルクソン以外の論述は「B」を要約したものであり、全体として極度に圧縮されていて、読者の理解を超える部分があるに違いない。そのさいはぜひとも元の「M」の第三章と第四章をご参照いただきたい。また、この論考の末尾の健康観についても「M」の終章やそれをまとめ直した「Mb」がある。併せて参照を乞う。

(2) 図式化するなら、フロイトは  ベルクソンは  と描けるかもしれない。

(3) そのような観点から、大会当日の発表では、フロイトの代わりに西田の後期思想に言及したが、まことに不十分なものであった。歴史的生命（歴史的社会的世界）の論理把握を主眼とした西田に関しては、「M」で時代的・世代的な観点から鳥瞰的に論じており、またいま新たに虫瞰的な視点から論考を準備中である。付言すれば、西田の生命観を生き物に限って論じる場合、重要な論文は「論理と生命」および「生命」である。ここでは一貫して、「環境と主体との〈作られる『作る』〉という動的循環の全体が、「生命」として捉えられている。そのような把握のしかたは、ヴァイツゼッカーやカンギ

レムの考え方と呼応するだけでなく、それをさらに包み越えるような広がりをもっている。

参考文献

- ・フロイト著作集、㉑ 人文書院、一九七一年
 - ・ベルクソン全集（新装復刊）、㉒ 白水社、二〇〇一年
 - ・（仏語テキストは Quatre/PUF、最新版に依拠した。）
 - ・V. ヴァイツゼッカー C「ゲシュタルトクライス」、木村敏・濱中俊彦訳、みすず書房、一九七五年
 - ・V. ヴァイツゼッカー A「生命と主体性」、木村敏訳・注解、人文書院、一九九五年
 - ・V. ヴァイツゼッカー K「病氣と人—医学的人間学入門」、木村敏訳、新曜社、二〇〇〇年
 - ・C. カンギレム C「正常と病理」、滝沢武久訳、法政大学出版社、一九八七年
 - ・森下直貴 Mb「健康への欲望と〈安らぎ〉」、育木書店、二〇〇三年
 - ・森下直貴 Mb「健康と生命倫理」、生命倫理一四号二一—一九、二〇〇四年
 - ・森下直貴 Mc「西田・三木・戸坂の思想と〈もの思考〉—「怪験と制度」の歴史哲学への視座」、「昭和思想」新論—二十世紀日本思想史の試み」第二章、津田雅夫編、文理閣、二〇〇九年
- （もりした・なおき、倫理学、浜松医科大学教授）